

第2部＜事例報告・総括討論＞ ＜報告1＞

学修フローチャートとラーニング・ルートマップの 作成・活用

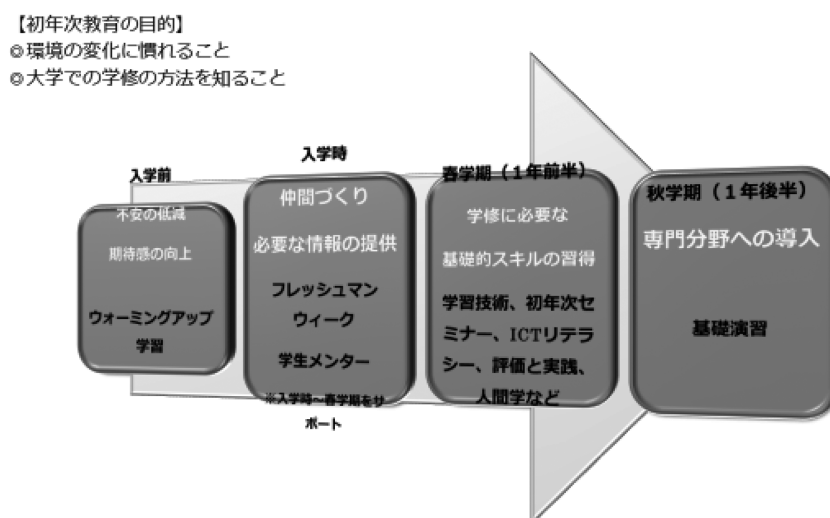
濱名 篤
関西国際大学

はじめに

本報告のタイトルが聞き慣れない「学修フローチャートとラーニング・ルートマップ」というものになっているが、これは関西国際大学の初年次教育で活用している学習過程における学修プランの作成と自己管理の仕組みのツールの名称である。

筆者が長年疑問に思ってきたことのひとつは、国際比較をすると日本の若者が自分自身に満足しているとか、長所があるといった自己肯定感が、非常に低いということである。仮説を立てるとすれば、日本の若者は百点満点で評価されるという経験を小・中・高とずっと受け続けてきており、授業中に手が挙がらないことと共通する。他人からの評価に対して受け身的で否定的な態度・姿勢になっているのではないかということになる。つまり、人から評価されることしか経験しないで、下手をすると大学卒業するまでその状態で、受動的に受け身的に評価を受けたことしかない。だから、評価は嫌い、という若者像になっているのではないのか。大学教育においては、そこからどう脱却させていくのか、これが根本問題ではないかと思っている。

現在の初年次教育プログラム



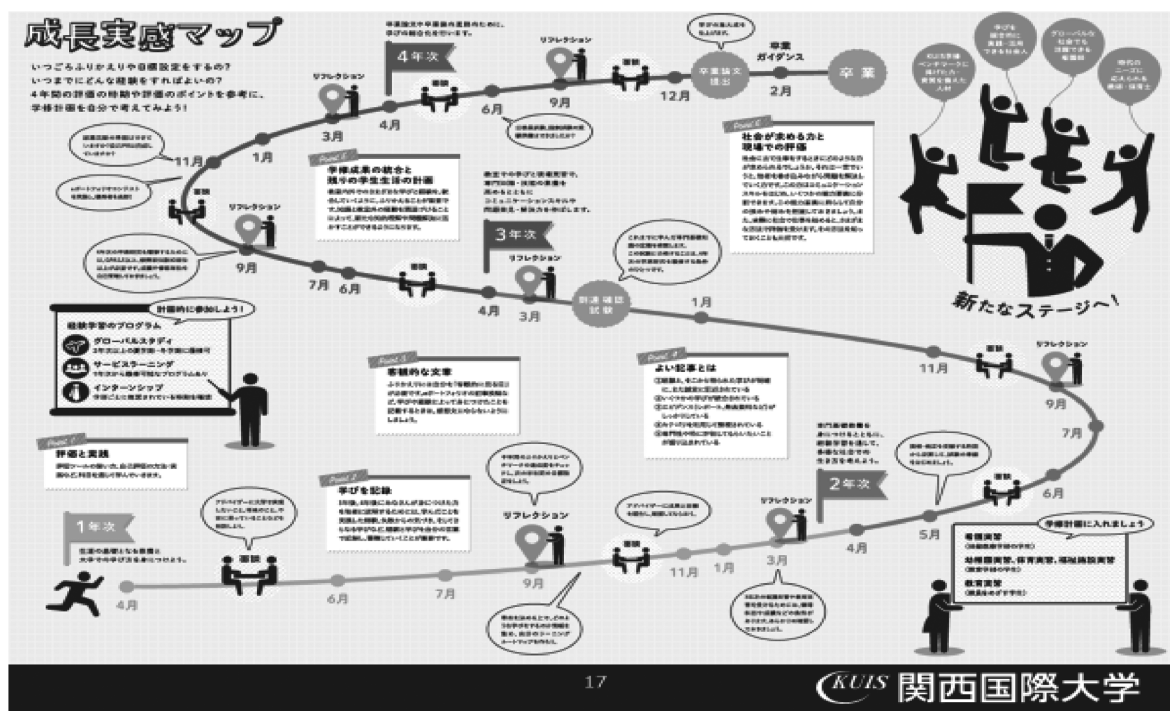
私どもの初年次教育の構造は上図の通りである。現在の初年次教育のプログラムは、入学前、入学時、それに、1年の前期がいわゆる初年次教育で、1年の秋は専門分野に対する導入という位置づけである。その中で、見慣れない科目名が春学期の「評価と実践」という科目である。「評価と実践」という科目は2016年に新たに開設した科目で、学修成果や評価についての理解と、将来を見越した主体的・能動的な学修プランの作成、さらに自己点検を自分でしていく習慣をつけるということを科目の目的としている。従来の整理でいうとこういう形になってくるかと思うが、内面的アイデンティティの中で、他者との協働に関する部分や、評価能力の育成というのは、多くの大学の初年次教育の中ではあまり取り入れていない内容かもしれない。

この「評価と実践」という科目は、1・2年で「評価と実践Ⅰ」1単位。3・4年の2年間で「評価と実践Ⅱ」1単位となっており、評価はパス・フェイルの2段階で行う。「評価と実践」を4年間履修した学生の卒業は迎えてはいない段階である。

科目開設の背景としては、キャリア教育との関係でいうと、予測不可能な時代になったことと関係している。少子高齢化については10年以上前からキャリア教育で取り上げてきたことであるが、AI・ロボット等々の発達によって“消滅する職業”についての議論が近年大きな話題になり、学生が将来のキャリアプランを作成するのが難しくなってきたこと、構造的に転職を余儀なくされる可能性は高くなっているのが現在の若者世代であるといえよう。日本の場合、野村総研の予測によれば、日本人の49%が現在就いている職業が、これからの10～20年で66%以上の確率で消滅する可能性が高く、構造的な転職の可能性が出てくる。こういうことを考慮すると、学生が卒業までに修得しておく能力やスキルとして、本学の教育目標として掲げてきた多様性理解と社会的貢献性、知識を活用する力とコミュニケーション・スキルなどに加えて、主体的に目標を持って、計画を立てて、行動する自律性がより重要になってくる。

「評価と実践」では、本学では入学時から様々なテストや調査を数多く実施してきたが、これらを受けさせるだけでは学生にとってはやらされ感だけが残る。データを取られて、データは自分たちの教育改善に使っていると言われたところで、学生から見ると何のためにそれを行っているかなかなか実感できない。授業評価に対する悪しき評判と同じことかもしれない。教員や大学は結果を活用しているつもりでも、学生にはその結果をどのようにフィードバックし、どう伝えているか。そのためには評価ということ自体を知識から理解しはじめ、目標と計画を確認して振り返りながら実行していく習慣であるとか、自分自身の能力・価値観というものを、他者に説明する力をきちっと確認して実践してくることの重要性を学んでもらう。さらには評価活動を学生自身が実践し、eポートフォリオも、この授業の中で作り上げ点検していくというのが科目内容である。

今般「成長実感マップ」と名付けた学生の4年間の学習と評価についてのマップを作製し学生に配布している。社会に出て行くまでのマップを、どこでどういう評価とか自分が他者に説明する節目があるのかということを知り、学生たちに4年間の展望というものをきちんと実感させる必要から作成した。本学では半年に1回、リフレクション・デイという日を設定し、本学のDPに掲げているKUIS学修ベンチマークの各項目のセルフチェックと、それに基づく振り返りを行う機会をつくっているが、それらも含めて、キャリア形成に向けての成長実感マップというのを作成して、どの時期にどのような評価や判断・選



スライド2 成長実感マップ

択をすることになるかを提示したものである。

実はこのツールを作る前に、「ラーニング・ルートマップ」というものを作成していた(図1参照)。4年間の8セメスターの中で、英語のテストであるとか、GPAであるとか、自分で目標を設定し、そのためにどの時期にどのような状態をつくっていくという計画を作成させる。

これは建築ゼネコンの工程表から着想した。それはとても細かく作業の手順と日程について作成され、仕事の内容ごとに、いつ何をいつまでにやるのかという計画で、遅れたらどう取り戻していくかという日程等の修正まで取り入れたものであった。それを参考に、学生たち自身も自分で、成績表の科目成績やGPAだけで一喜一憂するよりも、自分で計画を立て、進捗状況の振り返りを自分自身でできるようにすることを企図したものである。とりわけ本学では、グローバルスタディという海外プログラムや、コミュニティスタディという地域へ出て行くプログラム、インターンシップなど、経験学修プログラムが教育課程上大きな比重を占めているので、それをどこで行くのか、そのための準備をどうしていくのかという計画をマッピングする形で、ラーニング・ルートマップというものをつくらせようとしたのである。白紙から作るのは難しいだろうと、参考に標準マップというものを作成した。公務員になりたい人、企業就職する人、教員採用試験を受ける人では試験の時期自体が違うので、いつまでに自分の自己PRを固めるかという大きな違いが出てくるといことがわかるように、パターン別のサンプルを示したのであるが、それだけではうまくいかない。標準をそのままコピーする学生が少なくないのであった。

学生に、自分のラーニング・ルートマップをつくらせようとする、このようなフローで在学中のプロセスを想像させた。標準マップを学生に配って、授業の中でラーニング・ルートマップをつくっていかせて、アドバイザーが指導しながらマップを作成させるとい

ラーニング・ルートマップ 教育学部英語コミュニケーション学科 英語教員志望

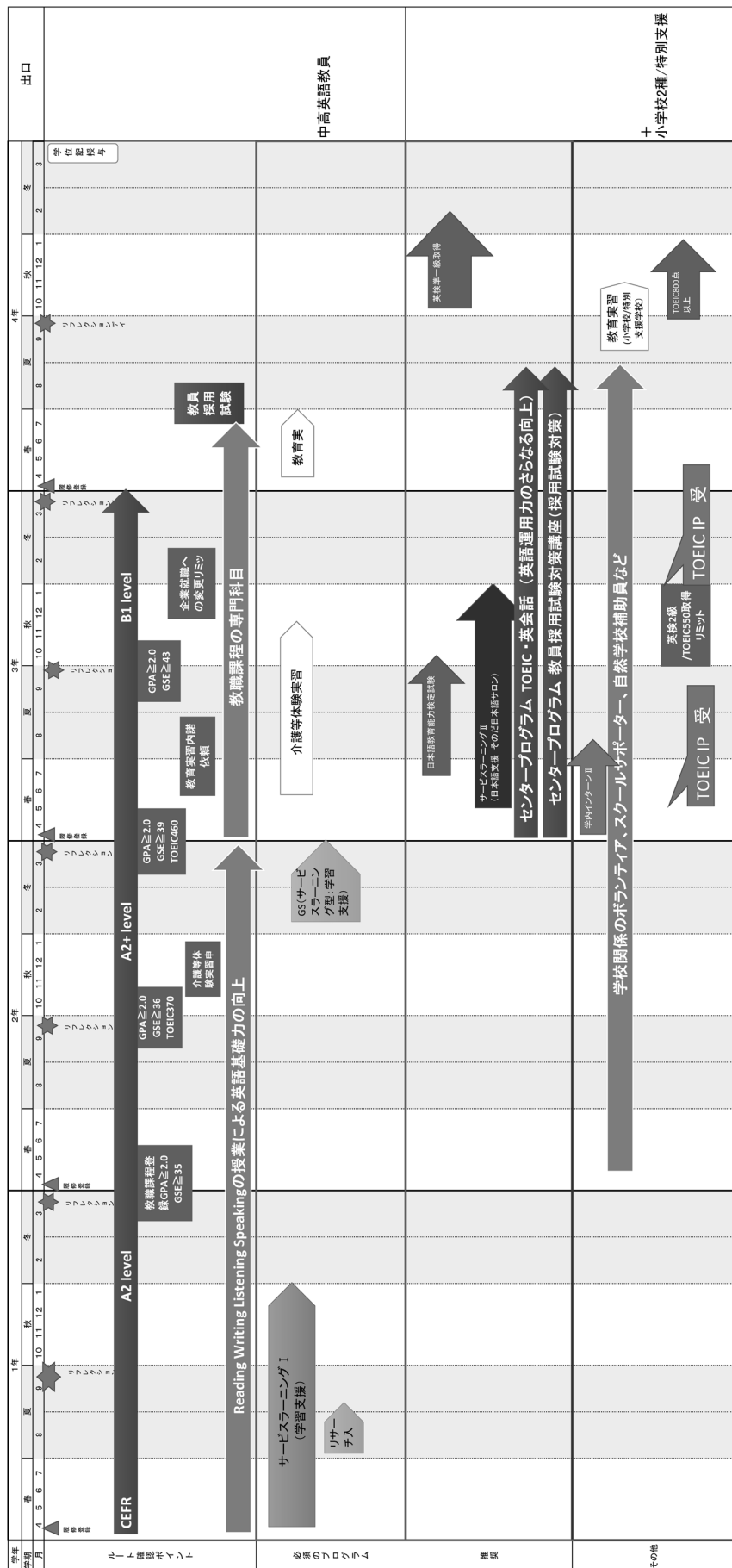
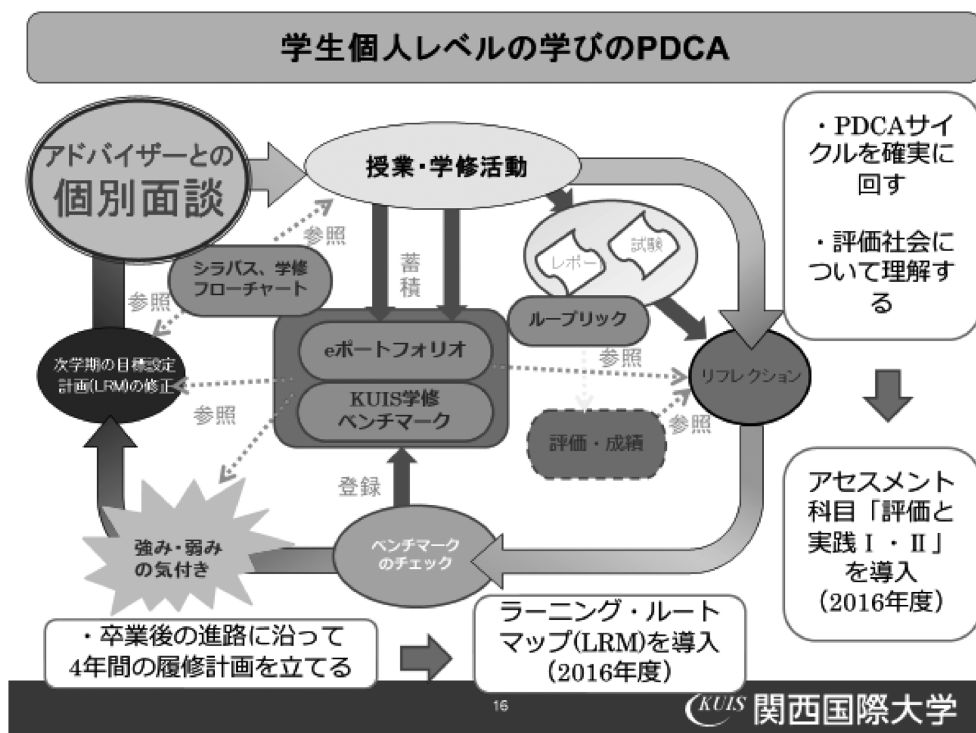


図1 ラーニング・ルートマップ (例)



スライド3 学生個人レベルの学びの PDCA



スライド4 eポートフォリオ(学修成果の可視化に関わる項目)の展開＝自ら記載する内容を選択する学修成果サマリ

う流れで実行した。それらのものは、このeポートフォリオの中で学修の記録を作成させていく上で参考にしてもらうものとした。

一番下の①で書いているデータは、私どもの到達目標、KUIS学修ベンチマークのセル

フチェックで、棒グラフ化したものである。

②はその根拠となるポートフォリオの記事。③のリフレクションカレッジとい経験学習プログラムの期中にアドバイザーとやりとりをする。つまりインターンシップ期間中、企業等に任せ放しではだめだということで、期中に教員と学生とがやりとりができる記録であり、教育学部の学生の場合は教職カルテについても、この中に取り込んでいこうとしている。学生たちの記録写真もeポートフォリオの中に組み込んでいく。eポートフォリオをつくろうというだけでは、多くの学生はなかなか積極的にはつくらなかった。そうした状態から「評価と実践」でeポートフォリオの作成・活用がどのように活発化するのかを見守っていききたい。なお、「評価と実践」は毎週授業があるわけではない。2年間で1単位である。その中で、断続的に評価にかかわる実践を続けていくことによってかなり学生自身もプログラムも改善することができてきた。例えば、標準パターンを幾つか設定し、公務員と警察官をめざすパターン、企業就職パターン、教員採用試験を経て教員というパターンといった例をみて、自分でそれをカスタマイズしてもらおうというマップづくりを行い、学期の終わりのリフレクションでふりかえり、必要に応じて見直しをしてもらおうとしている。

ラーニング・ルートマップの良い点としては、自分の計画と実践をビジュアル化して考えることができ、いつ大きな節目があるのか把握したり、この時期にこういう経験学習プログラムに参加するといった見通しを持って学修計画を立ててもらふこととであるとか、出口(将来の進路)をある程度明確にしてもらふ、あるいはゴールに向けてのスケジュールを考える。それで教員側とのやりとりで、そのマップを見ながら指導するので指導しやすいというようなことがある。

他方、問題点としては、進路をなかなか構想できない学生の問題がある。1年生の後期の段階でつくらせるのであるが、マップづくりのイメージが湧かないとか、進路を迷っている学生はマップがつくりにくい、といった課題がある。それに加え、2年後・3年後の経験学習プログラムの詳細が完全に計画できないという難点があったりして、進路が不明確な学生はより一層書きにくく、活用しない。また、修正・見直しの習慣ができていない学生もいる。標準マップどおりにつくると自分で考えなくてもできるので、自分でカスタマイズするせっかくの機会を生かすことができないなど、行き当たりばったりでもいいんだという学生にはなかなか合わないようなところが難しい点である。

ルートマップの活用方法の検討、eポートフォリオに出てくるエビデンス(証拠や根拠)が不十分になる学生の問題、何よりも作成意義やメリットが理解できていない学生に対する対応が課題となる。これらの課題は、何をどのタイミングで学ぶのかということや、どの時期にどういう情報や機会があって自分の適性を判断するのが実感できないことが問題だと考えた結果が学修フローチャートの作成という補完策であった。学修フローチャートは、学期・学年とどこでどういう教育プログラムがあり、専門のゼミの選択はいつ、何を基準に行うか、あるいは海外プログラムのインターンの準備授業をどこで取るか、そういうことを含めて作成してもらふ。作成に当たってはそれぞれの学科の教員が、どのタイミングでどのような学生にとっての判断材料があるかを考えて作り上げた。フローチャートでは、ある段階で、右に行くか、左に行くかを判断できる機会があり、その判断材料を提供することがわかるような情報を集約するという発想である。それは教員や大学の側が

情報提供していかないと学生だけでは予測しにくい。例えば自分で専攻を選ぶという時に、直前のガイダンスで決めろというのでは適切な判断ができるだろうかというような疑問があった。本学の場合2年生になる段階で専攻を決めるので、そのための情報を作成したわけである。

図2がその資料であるが、一番上の欄が、ルート確認のポイントである。例えば履修登録がそれぞれの学期の初めにある。リフレクション・ディと名づけたこの日が、成績表や答案、レポートを返却したりして次の計画を立てるタイミングになる。下部に専攻選択や留学など、卒業までの流れが書かれている。上段の緑の欄には、大学から提供する専攻や留学判断材料が、いつどのような情報が学生に流れるかということを記載している。緑の下の薄い橙色のところは、学生による専攻決定に至る流れを書いている。エントリーシートを出す時期である。3段目の灰色部分が、学生による留学を選択するまでの流れというふうになっている。これは国際コミュニケーション学部の場合であるが、留学する期間が1学期なのか、1年なのか、2年なのかと分かれる。そのための条件として、英語のスコアがどの段階でどこまで必要とされるか等が明記されている。そのためにはTOEFLなどの英語外部テストをいつ受ければいいのかといったことを組み入れていくわけである。

下段には、学部専攻における学修の内容ということで、どういうものを参考にするのか、エントリーシートや、自己分析診断結果、GPA、専門科目の成績評価、経験学習での学び等を材料に専攻を決めるように記している。下の青い欄が専攻選択についての情報で、2年になる時、ビジネスコミュニケーション専攻と、国際地域文化専攻のどちらを選ぶかの判断材料を示している。こういうものをそれぞれの学部で作成している。学生が専攻を比較的決めやすいのは、国家資格連動型の場合、はっきりと決まってくる。ところが、人文社会科学系とかは出口がさほど明確に分かりにくく、なおかつ大学1年生や2年生の段階で、将来の自分の適性というものを判断する材料を持っていない人たちに対してどのようにしていくのかというのが課題で、卒業後の進路は、将来イメージをできるだけ明確に選びやすくして、目標からナビゲートする形を設計している。判断材料を参考に自分のフローチャートをつくるという仕組みとしている。各学科とフローチャート自体が本当に考えてつくられているのかというやりとりをした中で、いつどのようなものが、将来決定を自分で考えるという材料になるのかということを明示することが必要だと考えた結果このような形式になった。

本学の学生個人の学びのPDCAというものを見ると、学修フローチャートとシラバスからスタートして授業・学修活動、レポート・試験、という流れで構造化している。レポートなどはほとんどルーブリック評価しているので、ルーブリックで学生が自分の弱点とできている点を自覚してもらって、それに基づいて学期末にリフレクションするという流れとなっている。

評価や成績と自分たちの活動全体を通じてリフレクションしたものを使って、ベンチマークのチェック、到達目標をどの程度実行できているかということを、ルーブリックを使って事項評価していく。自分のKUIS学修ベンチマークという到達度がどのくらいまで達しているかということを自己評価し、定性的なエビデンスはポートフォリオに記録する。強み・弱みに気づいて、次の学期の目標を設定して、アドバイザーと面談をして確認していくというPDCAというよりも、“ふりかえり”のサイクルを設けている。ふりかえ

入学年

入学年

入学年

入学年

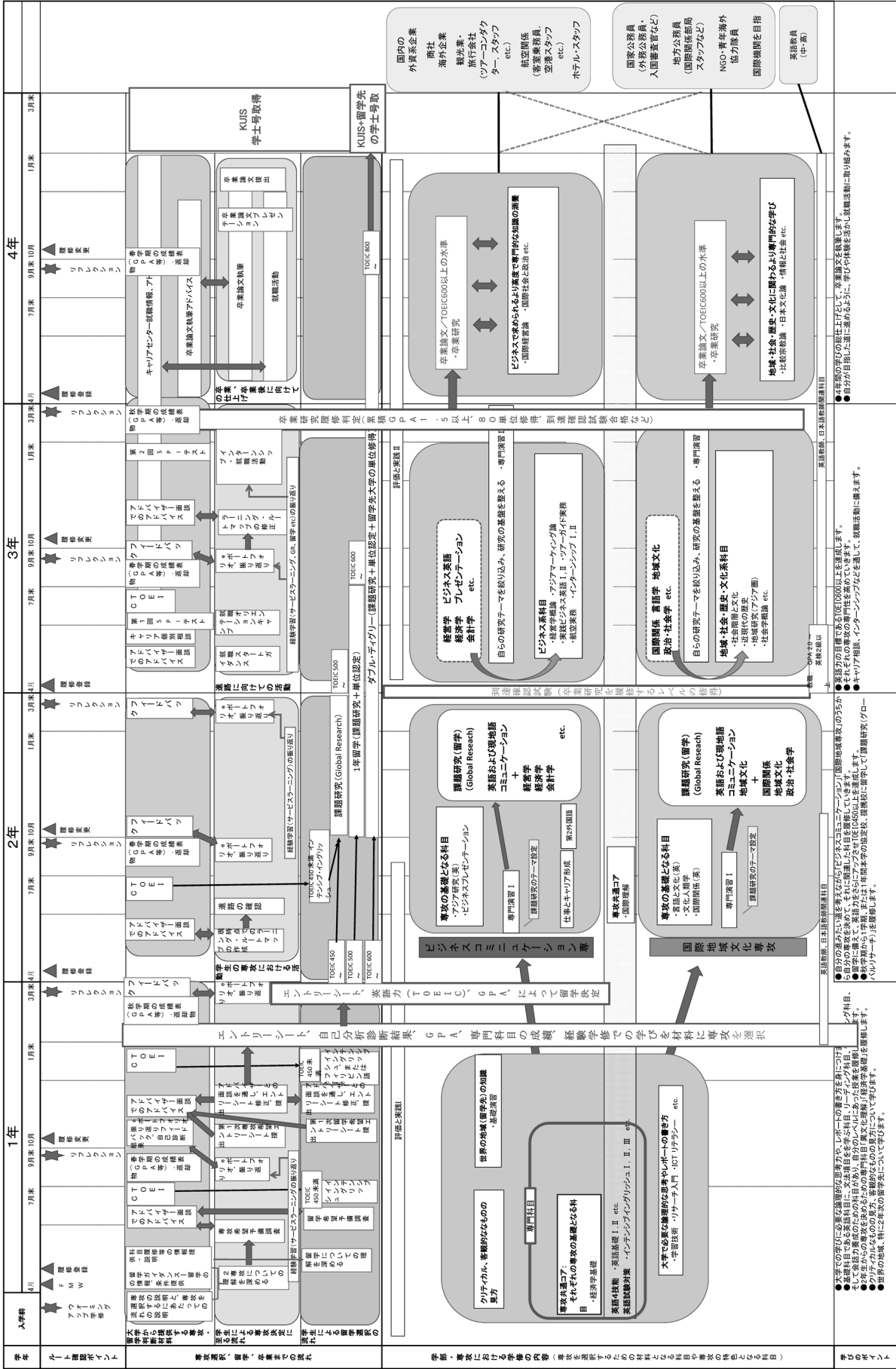


図2 学修フローチャート

りをして、漠然と反省するというよりは、多様な学生たち自身に自己について情報を提供した上で自分自身に課題を考えてもらうという仕組みにしている。

筆者は学生の意識を変えろというのは、そんなに簡単にできることではないと考えている。同様に教員の意識も簡単には変えられない。ただし、認識の共有は可能であろう。認識の共有と行動を変えられるような仕組みづくりというのは大学の教学マネジメントによって実現できるのではないだろうか。よく耳にするのは、教員の理解や意識が変わらないからできない。こうした状況には、やはりデータやエビデンスの蓄積によってできるだけ正確な現状認識を持ってもらうことと、学生たちが取り入れやすい仕組みを設計していくことが有効なのではないか。誠に残念ながら、日本の大学教育では受講科目数が非常に多くて、1科目当たりのエフォート率が10%以下という状況では、こうした仕組みをつくっていくというのも1つのやり方だと考えた。学生の学習過程においてもPDCAを確実に機能させ、評価社会について理解をしていく。こうした狙いもあって、この仕組みを構築したともいえる。

最後に、まとめと残された課題として、評価と実践というのは、そういう点では評価とか能力というものに対する理解と、自己評価点検の習慣づけには一定の成果を上げるのだということはいえる。ただし、専門職育成分野以外ではやはりなかなか将来のイメージを持ってもらうことは容易ではない。経験学修と組み合わせ、現実社会とのレリヴァンスを感じさせるアーリーエクスポージャー(早期体験)をさらに取り入れていくことを検討していく必要があるのかもしれない。

フローチャートは学生のためだけではなく、教員にとっても、いつどこでどういう判断材料を学生にフィードバックしなといけないのかということのを可視化させた。そういう効果があり、そしてeポートフォリオに情報を集中させるということで利便性・有効性を向上させることができていると思われる。こうした仕組みづくりは重要ではあるが、最終的には、学生が自分のこと(自分事)だと思って取り組むような、教員からの発問がミクロレベルでは必要となっていく。どのようにして学生たちに問い掛けをしていくのか。そういう点では、教職員の一番の役割は、評価者であると同時に、発問者という立場をどこまでつくり上げていくかが課題として残されている。